

第3章 流域の社会条件

3-1 人口

鈴鹿川の流域は、四日市市、鈴鹿市、亀山市の3市で構成されており、沿川市の人口は約13万人（平成17年）となっている。

経年的にみると、四日市市を中心に人口は増加傾向にある。

表3-1 鈴鹿川沿川市町人口の推移

単位:人

地 区	平成2年	平成7年		平成12年		平成17年		
	人口	人口	増減	人口	増減	人口	増減	
四日市市	河原田、内部、小山田、水沢の各地区	25,057	27,434	2,377	28,478	1,044	42,557	3,082
	旧楠町全域	10,835	10,844	9	10,997	153		
鈴鹿市	国府、庄野、加佐登、石薬師、井田川、久間田、椿、深伊沢、鈴峰、庄内の各地区	40,421	42,486	2,065	42,432	-54	43,073	641
亀山市	旧亀山市全域	37,632	38,631	999	39,334	703	49,253	2,647
	旧関町全域	7,413	7,497	84	7,272	-225		
合 計		121,358	126,892	5,534	128,513	1,621	134,883	6,370

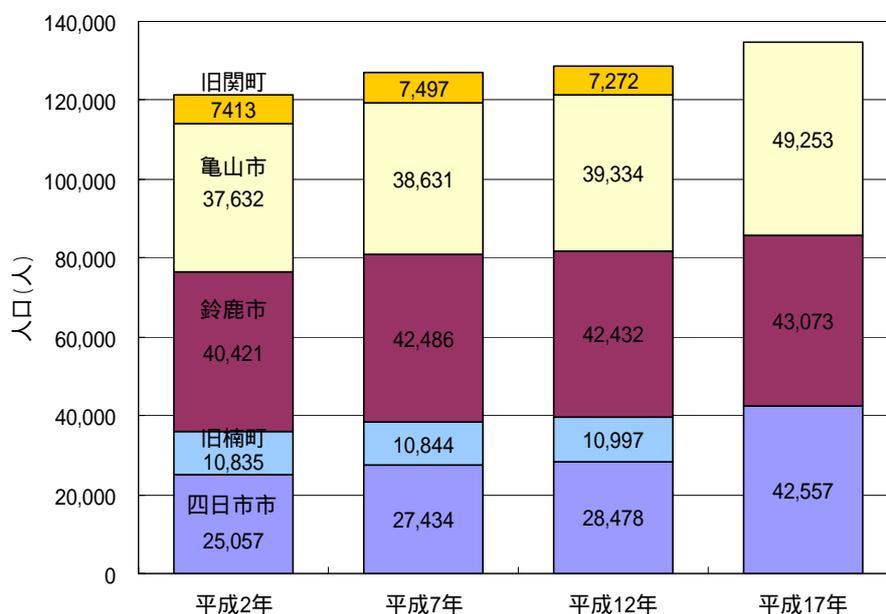


図3-1 沿川市町人口の推移

【出典：国勢調査】
 (ただし、平成17年四日市市は住民基本台帳による値)

3 - 2 土地利用

鈴鹿川流域の土地利用は、山地等が約 59%、水田や田畑等の農地が約 31%、宅地等の市街地が約 10%となっている。市街地は下流の四日市市を中心に広がり、農地は下流～中流部に広がっている。

上流部は山地となっており、山林面積の比率が高くなっている。

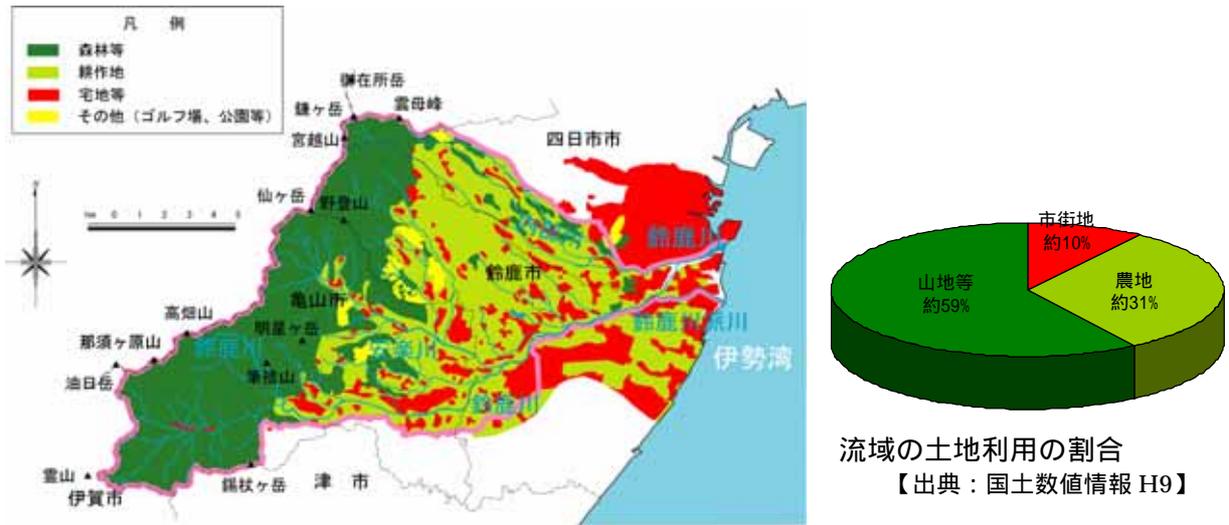


図 3 - 2 鈴鹿川流域の土地利用状況

表 3 - 2 鈴鹿川沿川市の土地利用状況（民有地）

単位：km²

	農地（田・畑）	住宅地	山林・池沼・原野	その他	合計
四日市市	130.84	51.36	19.32	10.55	212.07
鈴鹿市	127.97	31.60	15.91	11.73	187.21
亀山市	90.52	10.77	47.68	7.34	156.31
計	349.33	93.73	82.91	29.62	555.59

出典：三重県統計書(H17年度)

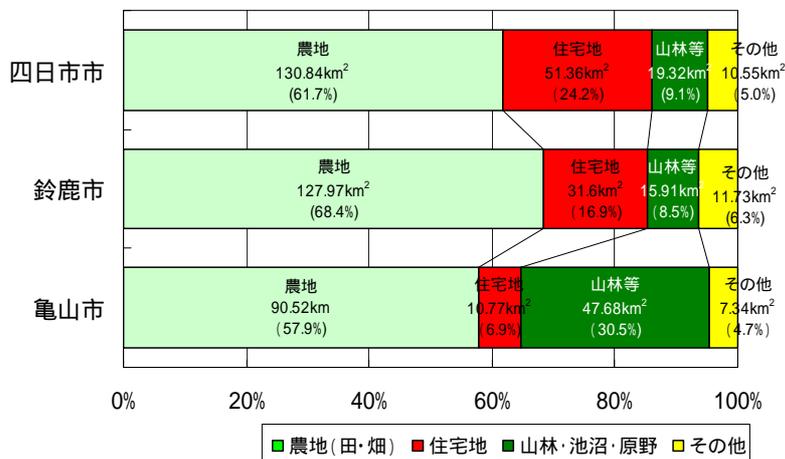


図 3-2 鈴鹿川沿川市の土地利用の割合（民有地）

【出典：三重県統計書】

3 - 3 産業・経済

沿川市町の産業分類別の就業者数を見ると、総数 276 千人に対して、第 1 次産業 3%、第 2 次産業 36%、第 3 次産業 61%となっている（平成 17 年）。

経年的には、昭和 35 年以降、第 1 次産業人口は減少を続け、第 3 次産業人口が増加している。第 2 次産業人口は平成 2 年までは増加していたが、それ以降は減少傾向にある。

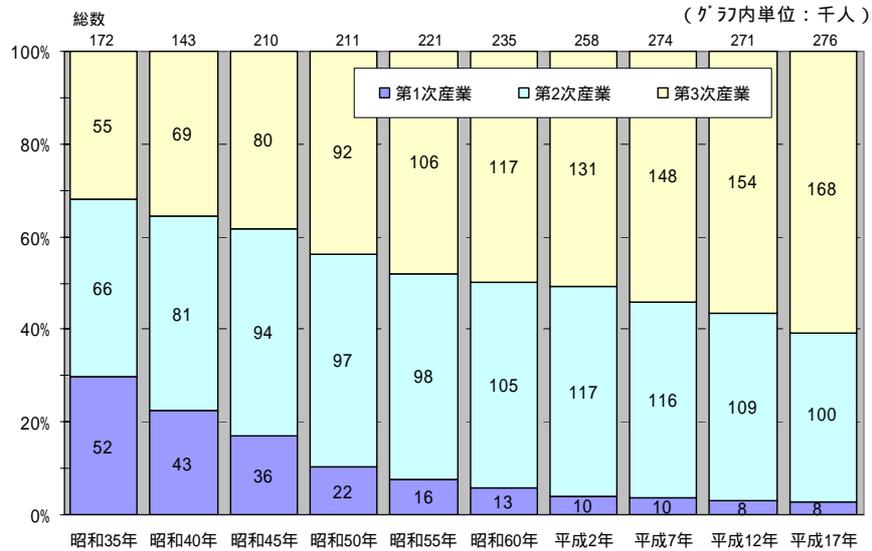


図 3 - 3 鈴鹿川沿川市町 産業別人口構成比（常住地）の変遷

（四日市市、鈴鹿市、亀山市、旧楠町、旧関町の合計）【出典：三重県統計書】

注) 第一次産業...農業、林業、水産業

第二次産業...鉱業、建設業、製造業

第三次産業...電気・ガス・熱供給・水道業、卸売・小売業、金融・保険業、不動産業、運輸・通信業、サービス業、公務（他に分類されないもの）

沿川市町における製造品出荷額は、昭和 40 年代の高度成長期以降急速に増加し、平成 2 年には約 3 兆 8 千億円に達している。その後、内陸部への工場進出に伴い平成 17 年には約 4 兆 5 千億円に達している。

また、農業産出額は、昭和 40～50 年代に増加し、昭和 55 年に約 37 億円まで達しているが、以降横這い傾向となっている、また平成 12 年以降は減少傾向となっている。

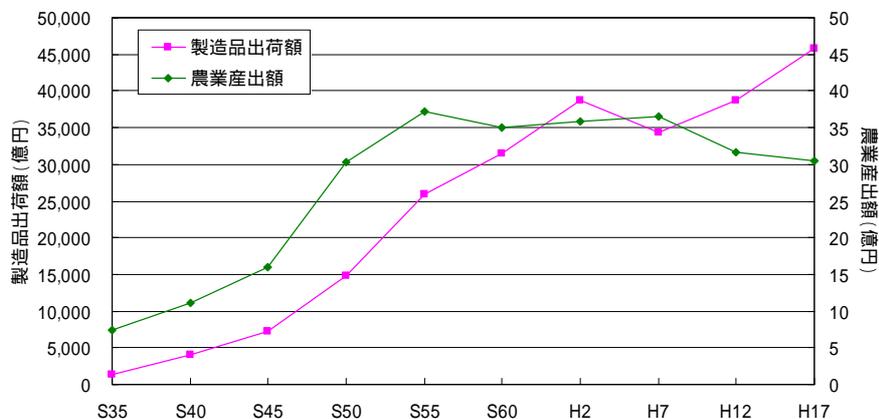


図 3 - 4 沿川市町における製造品出荷額、農業産出額の推移

【出典：三重県統計書】

工業については、産業中分類別の製造品出荷額の内訳は、輸送機械が37.3%、化学が18.2%、石油・石炭が8.6%、電子部品が8.0%、一般機械が6.8%、その他が21.1%となっている。このうち、上位3位を占める項目である輸送機械、化学、石油・石炭について、三重県全県に対し沿川市町の占める割合を見ると、輸送機械が58.8%、化学が82.4%、石油・石炭が93.2%といずれも三重県内の出荷額の半数以上を占めており、県内でも中心的な位置を占めていることが伺える。

自動車を中心とした輸送用機械は鈴鹿地区、石油コンビナートに代表される化学、石油・石炭については、四日市地区で盛んとなっている。

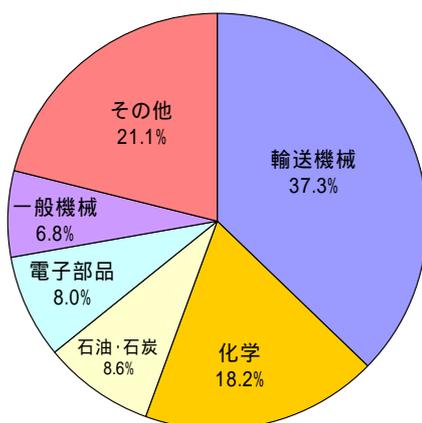


図3 - 5 鈴鹿川流域における中分類別製造品出荷額（平成16年）

【出典：三重県統計書】

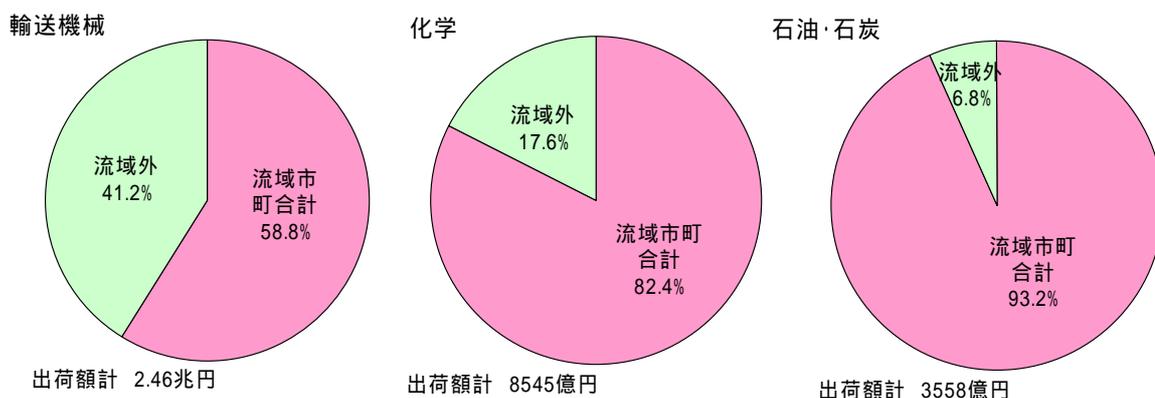


図3 - 6 鈴鹿川流域において代表される製造品出荷額（平成16年）

【出典：三重県統計書】

中上流域に位置する鈴鹿・亀山地区には、三重県のクリスタルバレー構想の拠点である亀山・関テクノヒルズが位置しており、液晶関連企業の集積地となっていることから電子部品・デバイス関連産業などを中心に発展を見せている。

下流域に位置する四日市地区は、四日市市を中心とした石油コンビナート群が形成され、県内最大の産業集積地であるとともに、最大の都市圏であり、情報技術産業などの幅広い業種が立地し、産業を先導する地域となっている。



図3 - 7 鈴鹿川流域の工業地域と主な企業の位置図

【出典：中部経済産業局 HP 工業団地リスト等より作成】

農業については、中下流域の平野部は、古くから水田耕作が営まれる農業地域となっているとともに、中流域に分布する傾斜の緩やかな丘陵地では、お茶の栽培が盛んである。特産品となっている荒茶の生産量は、全県生産量の8割を占めている。

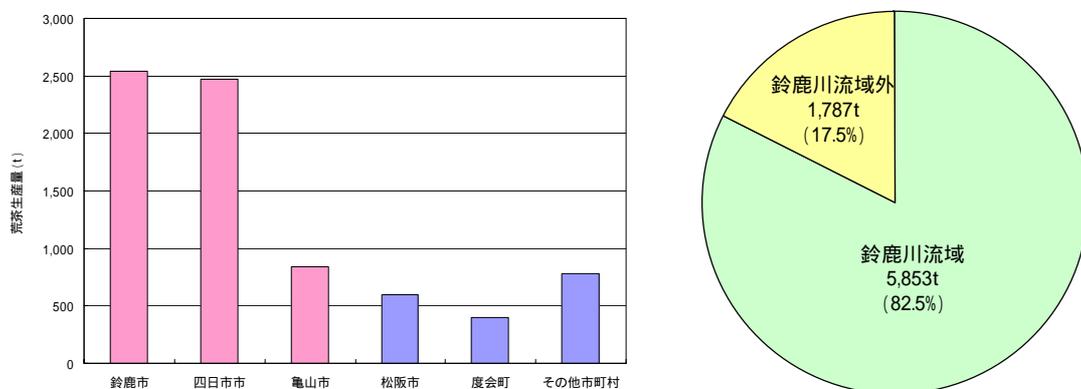


図3 - 8 鈴鹿川流域における荒茶の生産量 (平成16年)

【出典：三重県統計書】

3 - 4 交通

古来より、鈴鹿川沿いには東海道と大和街道など、近江・大和方面への重要な交通路として利用されており、亀山市関町には古代の三関である「鈴鹿の関」がおかれていた。本川沿いに旧街道が通る特徴を反映して、石薬師・野村の一里塚、東西の追分けといった交通の要所としての史跡や、石薬師・庄野・亀山・関・坂下の旧宿場町を忍ばせる街並みが今も残っている。

旧東海道は、現在は国道1号となり、東西を結ぶ大動脈となるほか、下流の鈴鹿市には国道23号（伊勢街道）が南北に通っている。上流の亀山市では、本川と加太川の分岐によって国道1号と加太川に並行する国道25号（大和街道）が通っている。また、流域の中央には南北に東名阪自動車道が通過しており、鈴鹿IC、亀山ICおよび伊勢関ICが配置されている。

鉄道は、鈴鹿川と並行して JR 関西本線が通っており、名古屋～大阪方面とを結ぶ動脈となっている。また亀山駅において伊勢、和歌山方面へ向かう JR 紀勢本線と分岐している。下流には、名古屋と伊勢方面を結ぶ近鉄名古屋線が通っている。



図 3 - 9 交通網図